



座談会……1

Charting a new course

An unconventional new president
takes the helm of APU

新学長が舵を取るこれからのAPU

進路・就職……5

Report: on-campus recruiting

オン・キャンパス・リクルーティングレポート

An interview with the general director of an overseas
Japanese corporation

日系海外法人社長インタビュー

Interviews with fall graduates

秋卒内定者インタビュー

新入生ワークショップ……7

First-year students give insights into intercultural communication

「国際相互理解」をテーマに展開された

新入生ワークショップ・プレゼンテーション大会

学生レポート……9

A helping hand

APUスピリットを胸に、GASSが動く

大学院教育……11

Independent Field Study (MBA)

MBA “インディペンデント・フィールド・スタディ”

Development Finance (GSA)

GSA “開発金融論”

TOPICS……13

Friendship agreements foster cross-cultural understanding in local towns

友好交流協定を通じて地元市町との国際交流が活発化

Honorary doctorate presented to Dr. SEN Genshitsu

千 玄室先生に名誉博士号を贈呈

The 7th top executive lecture

第7回トップ講演会

The spring 2004 conferral ceremony for scholarships and awards

2004年春季奨学金授与式・学生表彰式

Charting a new course

A special discussion with newly appointed university President Monte CASSIM gave three students a rare opportunity to candidly express their thoughts about their experiences at APU.

The initial nervousness of the students soon faded under Mr. Cassim's gentle guidance, and before long, the discussion shed its patina of formality and took on the relaxed air of a friendly chat—not unlike an intimate seminar with an affable professor. The students invited Mr. Cassim—whose early academic career in Japan parallels that of the students to share his ideas and advice, prompting him to speak animatedly about his wealth of experience as an exchange student in Japan; as a professor; and now, as the man at the helm of APU.

The president even found time to have lunch with the students after the discussion, despite it lasting far longer than scheduled. (English continued on the following page.)



Monte CASSIM

I hope to make APU an institution that synthesizes new ideas and new knowledge.

APUを「知識創造の場」として何かを発信していきたい

Monte CASSIM

After studying architecture at the University of Sri Lanka, Mr. Cassim then commenced a master's and doctoral program at Tokyo University. He subsequently worked in the Japanese private sector and at the UN Center for Regional Development as a chief and senior researcher before joining Ritsumeikan University in 1994 as a Professor for the college of International Relations. A native of Sri Lanka, he was appointed to the presidency of APU in April 2004.

モンテ・カセム

スリランカ大学建築学科卒業後、留学生として来日。東京大学大学院修士課程、博士課程で学び、国際連合地域開発センター主任研究員等を経て、1994年立命館大学国際関係学部教授。2004年4月に立命館アジア太平洋大学学長就任。スリランカ出身。



An unconventional new president takes the helm of APU

新学長が舵を取るこれからのAPU

新学長モンテ・カセム先生を囲んで、

「このキャンパスの中で今自分たちの考えていることを率直に話してみよう」という意図で企画された座談会。

最初は緊張気味だった学生の皆さんも、カセム先生の穏やかで温かい人柄にリードされ、

何だかゼミの一室で先生を囲んで話しているような、親しく、和やかな座談会となりました。

留学生として来日し、教師としての経験を重ね、これから学長としてAPUを引っ張っていかうとするカセム先生に、

参加した学生の皆さんも率直にアドバイスや意見を求め、予定時間をオーバーしてもなお話は終わらず、

引き続きランチミーティングとなってさらに盛り上がりを見せたようです。

不安と期待、そして希望・・・ 新入生の心境です

カセム：自己紹介代わりに少し私のことをお話しします。学生時代はラグビーばかりやっていたせいで、健康そうに見えても結構体の中はガタガタです（笑）音楽も大好きで、亡くなったマリア・カラスは大好きな歌手でした。結構音にはこだわりがあるので、家中にたくさんスピーカーを備え付けてますね。

ラジャ：私はカセム先生がこの大学をどう見ているかという点にとっても興味を持っています。立命館の教授でいらっしたカセム先生がAPUの学長になるという話を受けた時、どう思われましたか。

カセム：APUの学長に、という話があった時、本当にビックリしたんです。立命館大学に居た頃は、APU設立の構想が持ち上がった初期の段階で多少関わり、強い関心を持ってはいましたが、その後直接的にAPUの仕事に関わる機会がなかった私に、学長という任務はあまりに重かった。

ラジャ：迷いがあったと。

カセム：もちろんです。そして不安もあった。何より教員という立場で学生たちに触れ合うことのできるその時の仕事がとても好きだったから。しかし、こんな私でもAPUの未来を担う力がある・・・そう信じてくれる人がいることに大きく心が動いたんです。もちろん断わることもできたけれど、そう信じてくれてる人々を失望させることのほうが辛いと感じたんです。

エリカ：就任された今はどんなお気持ちですか。

カセム：新入生だった頃のみならず、いろいろなことを模索している段階です。でも、実際にこの土地に来て、日々仕事をこなすうちに、ここからまた新たな可能性が開いていくんだと希望が湧いてきましたね。

エリカ：私たちと同じなんですね。

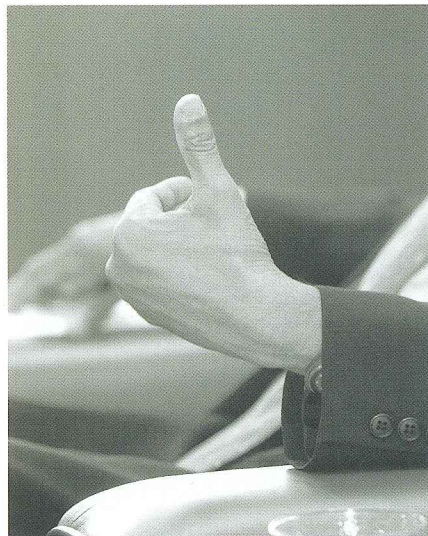
カセム：皆さんの期待に応えることができるのだろうかという不安と可能性という魅力。いつの時代も新しいことに向かい合い、開拓精神を持つ新入生の心境は複雑です。皆さんに私が良い働きができるように助けてもらわなくてははいけませんね。

言語の壁を超えた交流のかたちとは

カセム：ところで皆さんは、今どんなことに興味を持って、どんなキャンパスライフを送っているのですか？

エリカ：私は今RAとして、APハウスで生活する学生のサポートをしています。ただ、時々国内学生と留学生の壁を感じることがありますね。

須田：きっとそれはAPハウスでなくても感



じる壁だと思うよ。

エリカ：私たちRAが率先してその壁を取り除いて、お互いが理解し協調しながら暮らす方法を考えなくてははいけませんよね。実は今、他のRAと計画して、毎週1回映画上映会を開催しているんです。どんな映画が見たいかみんなに聞いて、上映する映画をピックアップしています。映画なら各国共通で楽しむことができるとして。

ラジャ：私たちのサークルが作っているAPUのWeb情報誌「Boundless」のサイトの中で、実験的に1つのテーマについてオンラインで話してみるのも面白いんじゃないかな。どういふ点が壁になっているのか、どこが噛み合わないのかって。

カセム：皆さんそれぞれの環境によって事情も違えば、壁を感じる部分も違うでしょうね。ですから、いわばこの問題は起こるべくして起こるもの、そうとらえてはどうでしょう。問題が起きたからといってすぐにあきらめてしまうのではなく、これがダメなら今後はこの方法で、といつも前向きに、話し合おうという姿勢が重要になってきますね。更に、そうして問題の解決法や、どうやって一つにまとめることができるかなどを話し合い、考えるプロセスも実に大切です。私も皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

須田：解決法に結びつくかどうかは分からないけど、例えば、言語にとらわれない交流の場があってもいいんじゃないかな。どうしても言葉の壁はあると思うから、複雑な会話がなくても協力できる、そんな環境がキャンパスにあればもっとお互いを理解できると思います。

ラジャ：言語にとらわれない交流ってたとえ

須田：エリカが開いている映画上映会もそのひとつだと思うし、他にも体育や音楽の授業とか、各国の料理を作るとかカセム先生はどういった交流を経験されましたか？

カセム：1970年代に日本を含むアジア各国から集まった研究者達と『グループ・アジア'80』というチームを作り、8年間にわたって共同研究を行いました。その時は共通の言語を日本語として、「80年代のアジアはどうあるべきか」というテーマで様々な分析を行い、議論を交わしました。アジアのある地域

SUDA Masashi

“...what if we were to have activities that don't depend on language ability?”

例えば、言語にとらわれない交流の場があってもいいと思うんです。



SUDA Masashi

APS 2, Japan/APS NEWS Society

“This was a great opportunity to speak with President Cassim and hear what he thinks about a lot of different things. For APU to improve, I think we need to make more opportunities like this for students.”

須田 征士

APS2回生、日本 / 立命館アジア太平洋大学 新聞部代表

カセム学長と直接お話しして、学長の考えを知ることができた非常に良い機会でした。今後はAPUをよりよくするため、もっと多くの学生がこうした機会を持てるように積極的に求めていく必要があると思います。

に対して、自分の専門分野の視点から眺めると何が見えてくるのか、我々の研究が自分の国や地域でより良い方法で生かせることはないかなどを考えたこの8年間は、私にとって素晴らしい経験となりました。同時に、お互いの知識や経験を伝え合う言語を持っていること、互いに比較することのできる地域や国をバックグラウンドに持っていること、この2つの土台がいかに大切かということを実感したのです。皆さんにも、まず自分の得意分野を作り、それを相手に伝えることのできる言語力を持ってもらいたい。そしてAPUはこうした土台づくりができる第1級の学習機会が用意された場所だということを感じてほしいですね。

ラジャ: そうなると私にとっては日本語の勉強が重要になってきますね。先生おすすめの日本語の勉強法はありますか。

カセム: 新聞や雑誌の記事にある表やグラフの説明を読むこと。そうすれば、その記事を読んでいく手がかりになる言葉がたいい含まれています。ということは、時事問題のカギになる言葉もたくさん含まれているという

ことです。私はそれほど漢字が読めない時でも、こうした勉強を日々続けていたので、明治時代の統計が読めた。

ラジャ: 学長直伝の日本語勉強法。早速実践してみます。

APUは小さな地球、小さな国連

エリカ: これからAPUで学長が考えているプランを教えてください。

カセム: APUは開学からこれまで、日本の中だけでなく、世界各国から注目され、多くの著名人が興味関心を持って、このキャンパスを訪れてくれました。これからはそうした皆さんとの関係を活用して、皆さんの知恵と知識をAPUに結集し、APUを「知識創造の場」として何かを発信していきたい、と考えています。

実は今年10月、国連大学と立命館が共催する国際会議をAPUで開催する計画があります。これには一流の専門家が参加して、イラク後の新しい国際秩序をどうすべきか、といった議論を交わしていきます。このような会議が我々のキャンパスで開催されるというのは学生の皆さんにとって非常に貴重な機会になると思いますよ。

APUはいろんな国の人が学び、暮らす、いわば小さな地球のカタチ、小さな国連、そういった過言ではないでしょう。この環境を生かして、お互いの知識や経験を伝え合う言語をしっかりと学び、各国の友人とそれを比較し、議論しながら相互の理解を深めて欲しい。そうすれば、きっと他のどこでも成し得ない、APU独自の発想やプランが生まれ、発信できるのではないかと期待しています。いえ、むしろ確実に実現できる大学だと確信しています。APUが持つ財産を大切に、ますます学習意欲を高め、切磋琢磨して欲しいですね。

New students face uncertainty, hope and high expectations

Cassim: First of all, let me tell you a little bit about myself. Back when I was a student, I was very much into playing rugby. So although I may look relatively healthy on the outside, I'm actually quite smashed-up on the inside! (laughter) I'm also a music lover, and a big fan of the late Maria Callas. I have a lot of speakers set up at home; I'm quite fussy about sound quality.

Rajat: I'm very interested in hearing your impressions of APU. What did you think when, as a professor of Ritsumeikan University, you were suddenly nominated for the presidency of APU?

Cassim: I was absolutely stunned when I was offered this APU position. Yes, I was marginally involved in the very early discussions when the concepts for establishing APU were being discussed at Ritsumeikan University. I had strong views on the APU concept, but was never directly involved. That's why I felt it was an extremely weighty responsibility to take on.

Rajat: So you hesitated?

Cassim: Sure, of course I did. I loved teaching and directly interacting with students, but at the same time, I was really moved by the fact that people believed in my ability to head APU. I could have declined, of course, but I didn't want to disappoint the people who had placed their faith in me.

Elica: How do you feel now that you're here?

Cassim: I'm still finding my way around a lot of things, just as I'm sure you must have done when you first arrived. However since coming to APU and working on this campus on a day-to-day basis, I've become captivated by all the exciting new

“We RAs need to take the initiative and work to break down this wall to bring a heightened sense of cooperation and understanding to the dorms.”

私たちRAが率先してその壁を取り除いて、お互いが理解し協調しながら暮らす方法を考えなくては いけませんよね。

KRASTEVA, Elica Krasimirova



Elica

APM3, Bulgaria / AP House Resident Assistant
“I got the sense that Mr. Cassim is a very warmhearted person. He has very broad interests and has had considerable experience in a variety of fields. In this regard, I hope to be like Mr. Cassim thirty years from now.”

エリカ

APM3回生、ブルガリア/APハウス RA
学長の人柄がお話の中で伝わってきました。それに色々なことに興味を持ち、色々な経験を重ねている。私も30年後には現在のカセム先生のようになれればと思いました。

Charting a new course

An unconventional new president takes the helm of APU



possibilities on the horizon.

Elica: That sums up how we feel, too.

Cassim: Throughout the ages, new students have always had complex and contradictory feelings about their situation, especially when charting new frontiers. Likewise, I do have some doubts about my ability to live up to everyone's expectations but, at the same time, I also see great potential in what can be accomplished at an institution like APU. You must help me to make sure I do not waste my time here.

Crossing the language barrier

Cassim: Tell me about your interests and what kinds of activities you are engaged in here on campus?

Elica: I help out students at AP House as an RA (Resident Assistant). I confess there are times when I feel a wall dividing the international and domestic students into two groups.

Suda: I'm sure this is something that people feel outside of AP House, too.

Elica: We RAs need to take the initiative and work to break down this wall to bring a heightened sense of cooperation and understanding to the dorms. I've been holding a weekly film screening for just this reason. I ask in advance to see what people want to watch and select movies from the suggestions I received. After all, movies are something that everyone can enjoy—regardless of nationality.

Rajat: I'm involved with APU Boundless, the university's online newspaper. It's always interesting to have online discussions on the website. Regardless of the topic, you never know just how cultural barriers and discrepancies will influence the conversation.

Cassim: Every social environment is governed by its own unique dynamics, and we encounter different challenges depending on the situation. Perhaps such challenges should be embraced as a natural part of one's development. What is important is that you don't give up straight away when a problem arises; if something doesn't work—try again with a different approach. I believe that people should stay positive and keep communication channels wide open. The process of consolidating and resolving an issue is no less important than the issue itself. So let's work together on dismantling the walls that divide domestic and international students. I'd be more than happy to help.

Suda: I don't know if this would solve any problems, but what if we were to have activities that don't depend on language ability? The language barrier is here to stay, so why not create more activities that don't require complex conversations? I think this would really help students connect with one another.

Rajat: Activities that don't depend on language?

Suda: Yeah, like Elica's film screenings for example. Also, we could have courses that focus on athletics, music, or cooking food from different countries. How did you get along with others, Mr. Cassim?

Cassim: Back in the 1970s, I spent eight years conducting research on how Asia should develop in

the 80s. The researchers in this group, called "Group Asia '80", were of mixed origins, coming from both Japan and other Asian countries. This meant that our common language was Japanese. We investigated a wide range of issues, analyzed individual regions through the lens of our own academic specialties, and sought to uncover ways in which our research could be applied to better our home countries and regions. It was an amazing experience for me that drove home the importance of two things: having a shared tongue in which to communicate your ideas and knowledge, and working with people who have contrasting national or regional backgrounds. I suggest that you first develop your knowledge of a particular field, and then improve your language skills so that you can communicate this knowledge to others. I hope that your time at APU will give you ample opportunity to do this.

Rajat: If that's the case, we really need to concentrate on studying Japanese. Can you suggest any effective study methods?

Cassim: How about reading the explanations of graphic or pictorial contents of newspapers and journals? The charts and graphs in particular provide good clues to an article's content and many words that are useful for understanding current events. This is how I used to study, even when I couldn't read very many *kanji* characters, and before long I was reading Meiji Era statistics!

Rajat: President Cassim's personal Japanese study method... I'll give it a try right away!

APU: a miniature UN: a microcosm of planet earth

Elica: What kinds of plans do you have for APU?

Cassim: Since APU opened its doors to students, it has attracted the interest of prominent figures not only within Japan, but around the world. Many of these people have visited APU. I hope that we can use our relationship with these people to make APU an institution that synthesizes new ideas and new knowledge.

This October, we will host an international conference at APU, jointly sponsored by the United Nations University (UNU) and Ritsumeikan. This conference will bring top flight international experts here to discuss how we should chart a new international order after the recent Iraq crisis. That this will occur on our campus will be an invaluable experience for APU students.

With people from so many countries gathered here, it's no exaggeration to say that APU is like a miniature UN: a



microcosm of the world. I hope that you will take advantage of this learning environment to become proficient in a language in which to communicate your thoughts to your peers. I also hope that you will work to deepen mutual understanding through discussing and comparing ideas with your friends from around the globe. If you do this, I truly believe that we will create a unique paradigm for education that cannot be realized anywhere else in the world. So, make use of the assets you have here, work hard to achieve your goals, and most importantly, never lose your thirst for knowledge.

JAIN Rajat

"It's always interesting to have online discussions on the website. Regardless of the topic, you never know just how cultural barriers and discrepancies will influence the conversation."

実験的に
1つのテーマについて
オンラインで話してみるのも
面白いよね。
どういう点が
壁になっているのか、
どこが噛み合わないのかって。



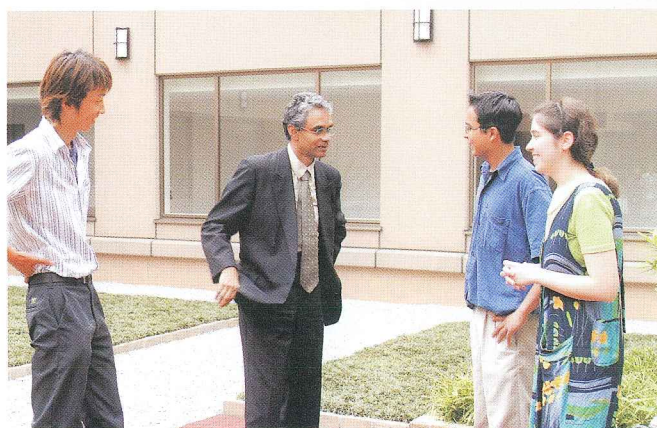
Rajat

APM 1, India / APU Boundless

"I really liked what Mr. Cassim had to say, especially about always keeping a positive attitude when living in a foreign culture."

ラジャ

APM1 回生、インド / APU Boundless 代表
カセム先生のお話は、大変興味深く、
特に異なる環境や文化の中でも恐れ
ず前向きに進む先生の考え方はとても
刺激的でした。



WHAT DOES THE EMPLOYMENT SCENE LOOK LIKE TODAY? Goals for tomorrow: Different thoughts and different rewards

就職最前線で何が見えた?

掴みたいもの、求めるもの…それぞれの思い、それぞれの手ごたえ

On Campus Recruiting—Unique to APU, the On Campus Recruiting program, involving human resource personnel from different companies and organizations coming directly to APU to hold recruitment seminars, interviews and examinations specifically for APU students, is gathering extremely high interest and recognition.

Running since last year, this program has welcomed participation from over 100 companies, including 87 companies in its first year. This program is taking hold, a lot faster than expected, as a program that gets results for both parties. We followed the on campus recruiting activities of Toray Industries, Inc., which came down to APU on May 28 to recruit international students.

オン・キャンパス・リクルーティング—企業や団体の人事担当者の方々に直接来学して頂き、APU学生のみを対象に説明会や面接・筆記試験を行うという、

APU独自のこの取り組みは、非常に高い関心と評価を頂いています。

この取り組みを始めた昨年は87件、今年に入ってからはずで100件を超える企業から申し込みを頂き、双方に成果の上がる活動として予想以上に速いスピードで定着しています。

今回は、5月28日に国際学生を対象に行われた

オン・キャンパス・リクルーティングを、東レ株式会社のご協力で行った。その一日を追ってみました。



■ 12:50

13時の開始を前に、すでに教室には緊張した面持ちの15名の学生がスーツ姿で待機。言葉も少なく、独特の雰囲気教室を包んでいる。

■ 13:00 企業説明

東レ(株)本社の小西明子人事採用課長をはじめ、2名の人事採用担当者によって会社説明が始まる。当然のことながら説明は日本語で行われ、日本語版の会社案内ビデオが上映された。これらを当たり前に理解できるとい前提でスタートするのだ。小西課長の「あまりかしこまらず、気軽に質問を」という言葉にも、なかなか緊張は解れない。会社説明を担当された石井さんの冗談を交えながらの進行に、少しずつ和んだ雰囲気に変わっていくものの、学生の集中力が途切れることはない。配られたパンフレットを見ながら真剣に説明を聞いていた。

■ 14:00 学生からの質問

説明が終わり、質疑応答の時間。ある中国の学生からの「もし採用が決まったら、言葉や習慣のことも含めて、母国で働くことが一番力を発揮できるのでは?」という質問に、小西課長の答えは「中国の方から中国へという狭い考えではなく、むしろ東レグループの基幹人材として、仕事のノウハウから経営の理念までしっかり身につけた上でグローバルに活躍して欲しいと考えています」というものであった。

■ 14:30~17:00 いよいよ試験

筆記、面接と、いよいよ試験が始まった。面接は3人1組のグループ面接。面接試験に臨むため教室に入る学生、そして面接を終え出てくる学生—さまざまな表情が行き交う。

■ 17:05 試験を終えて学生は…

質問は「どうして東レで働きたいのか」「自分の持味は何か」などオーソドックスなものが多かったとのことだが、やはり面接という独特の雰囲気で自分を印象づけるのは、想像以上に難しかったようだ。台湾出身の学生は、「この緊張が最大の壁。友達と何度も練習したのに、本番となるとやはりあがってしまった」と話していた。ただ、グループ面接というスタイルは、他の2人の応対

を見ながら自分と比較し、ウィークポイントが発見できるという思わぬメリットもあったようだ。

■ 17:10 全てを終えて人事採用担当者は(小西採用課長、石井さんにインタビュー)

「ここまでセッティングして頂けるのはAPUだけ。効率よく、しかもじっくりとリクルーティングできる」と、昨年に続いて企画に参加頂いた小西課長。「学生の皆さんの中で、東レに対する理解が進んでいることがありがたいですね。さらに『なぜ日本企業で働きたいのか』『どこに興味があるのか』この点についての意識が非常にはっきりしているのも頼もしく感じました。東レは素材メーカーとして、単に「作ったものを売る」だけでなく、私共の素材で世界のお客様にソリューションを提供できる存在でありたいと考えています。そのためには、人への興味や関心、異なる文化・生活への理解がなくてはなりません。APUで学ぶ学生さんはそうした素養を身につけていると思いますので、さらに東レマンとしてグローバルな舞台で自分を磨いてほしいですね。」

一方石井さんからは、「面接で話を聞きながら、皆さんがAPUを本当に誇りに思っているのが伝わりました」との言葉に続いて、「APUのオン・キャンパス・リクルーティングは企業間でもその認知度が上がっています。今後卒業生が実績をあげていけば、ますます就職戦線での評価が高まっていくでしょう」という言葉が聞かれた。



今後APUとしては、このオン・キャンパス・リクルーティングからさらに進化した形の「採用直結型長期インターンシップ」も具体化させたいと考えています。

■ 12:50

The 15 students, all dressed in business attire and looking nervous, were already in the classroom, waiting quietly in anticipation for the company seminar to begin.

■ 13:00 Company seminar

Ms. Akiko Konishi, Toray industries Personnel Recruitment Division Manager, along with two other personnel recruitment supervisors, began the company seminar, which of course was held entirely in Japanese. This was followed by a Japanese video presentation introducing Toray Industries Inc. The day's program began on the assumption that all students could understand Japanese. Despite Ms. Konishi telling students to "relax and ask questions freely", the students remained nervous. Only after Mr. Ishii, the person in charge of the presentation, started to make a few jokes, did the students begin to relax, but not once did they lose their concentration. They continued to listen in earnest to the presentation while reading the Toray company pamphlets.

■ 14:00 Question time

After the presentation there was question and answer session. A Chinese student asked "wouldn't we be able to meet our full potential if, after we were employed, we went to work in our home countries, where we already understand the language and culture?" Ms. Konishi answered this by saying "instead of automatically assigning Chinese employees to offices in China, we want our people to master their work and the corporate philosophy as key personnel in the Toray Group, able to function on the global stage."

■ 14:30 to 17:00

Recruitment examination and interviews

The written examination and interviews began. Students were divided into groups of three for their interviews and there was an array of different expressions on their faces as they entered and exited the interview room.



■ 17:05

Student comments

Despite there being a lot of standard interview questions like, "Why do you want to work at Toray?" and "What are your strong points?", the interview atmosphere still made it more difficult than expected to effectively express and sell oneself. A Taiwanese student commented that "being nervous was the biggest hurdle. I practiced interview questions many times with my friends but I still got nervous when it came to the real thing." One student also commented that one of the merits of having a group interview was that you could compare yourself to the other two candidates, and discover your weaknesses.

■ 17:10 The end of the day: an interview with recruitment personnel Ms. Konishi and Mr. Ishii

Ms. Konishi, who was participating in the on-campus recruiting program for the second year running, commented that "APU is the only university that goes to this much trouble. The program is very effective, meaning that we don't have to rush the recruitment process. It is great that Toray Industries is becoming known amongst the students. I strongly felt that students knew exactly why they want to work in a Japanese company and what they are interested in. As a materials manufacturer we want more than to just sell products, we want our materials to help provide our international customers with solutions. To accomplish this, employees must be interested in people and also be able to understand other cultures and lifestyles. I think that students studying at APU are getting this kind of training, and we want to help these students realize their full potential on the global stage, as employees of Toray."

Mr. Ishii commented that "after listening to the students talk during the interviews, it is clear that they carry a strong sense of pride for APU. The on-campus recruiting program at APU is becoming more and more known within the corporate world. APU will no doubt continue to gain favorable recognition in the job market as upcoming graduates succeed in their chosen professions."

APU is planning on turning its on-campus recruiting programs into long term internship programs that will lead directly on to full time employment.



I want to work at a company that employs these kinds of people.

こんな先輩が働く企業で働きたい

HAMAGUCHI Kenichi

APM 4, Japan

Unofficial Job offer from
NOMURA SECURITIES CO., LTD.

"In my first year at APU we decided to make a group where students could get together in a relaxed and friendly environment. Apparently some people think that all we do is drink but this isn't true. I approached the leaders of other clubs and students who were very pro-active in participating in activities on campus. I think that the experiences I have had as a part of this group, coupled with my experiences as an exchange student in China have played a key part in re-evaluating some of my personal values. There are good people, and bad people. I want to become a person who understands many different kinds of feelings. Born in Yokohama, and raised in the big city, I am now spending my university life in the country, Oita. Having lived in both places, I think this is something I would not have been able to experience in the big city. What attracted me to Nomura Securities was the energy and positive attitude of the people I met during a Nomura Securities company seminar. I decided then that I wanted to be employed at a company where I could work with people like this. The interview I had with this company was also very unique. I was asked "what would you do if you didn't like curry and your boss invited you to go to a curry restaurant?" A lot of different things went through my mind. "What are they really asking me?" and "What are they trying to find out about me?" I answered that 'I would go to the curry restaurant and I would order curry'. I don't know if what I said was right or wrong but the question certainly caught me off guard."

濱口 健一

APM4 回生、日本

野村證券株式会社 内定

1回生の時、同好会のような気軽集まるグループを作ろうという話になりました。こういうただの飲み会だと思われそうですが、ちょっと違うんです。サークルのリーダーなど、何かに熱いものを持っていて、積極的に行動している人達に声をかけました。この会で経験したことと中国での交換留学の体験が私の価値観を変える大きなきっかけになったと思います。いいヤツも悪いヤツもいる、だけどころな気持ちがある人間になりたい、そう思うようになったんですね。横浜に生まれ、大都会で育った私が大分という地方都市で大学生活を送っている。この両方を知る、これは都会の大学に通っていたら決して知り得ないし、経験できないことでした。そんな思いが強くなる中で野村證券という企業に惹かれたのは、野村證券主催のセミナーに参加し、そこで出会った社員の方々が非常に魅力的だったからです。こんな人たちが働く企業で自分も働きたい、そう感じました。憧れの企業の面接試験もまたユニークでした。「自分はカレーが嫌い。でもある日上司にカレー屋に行こうと誘われた。さて、その時君はどうする?」。自分に何が問われているのか、自分の何が試されているのか、色々なことがグルグルと頭の中を駆け巡った



あげく、「そのカレー屋に行ってももちろんカレーを注文します」と答えました。果たしてこの答えが正しかったのか、間違っていたのか今はわかりませんが、でも非常にドキリとさせられた質問であったことだけは事実です。

Language has been the key to my development.

私を成長させたのは、
言語というコミュニケーションツールでした

ADHIKARI, Sudeep

APS 4, Nepal

Unofficial job offer from FUJITSU LIMITED.

"I couldn't speak much Japanese when I first came to APU, so I started learning from the guidebook, and in half a year I could get by in most conversations. After taking computer courses, and discovering how much fun creating systems can be, I decided that I wanted to find a job in the Information Technology field. My future dream is to become a systems engineer involved with the development of medical software. In addition to strengthening my technical skills, I think that working in a job I enjoy will help me build up good team work skills.

As well as learning Japanese at APU, I also put a lot of effort into making friends. I wanted people to understand me; everybody feels the same way. In order to do this I would always try and listen carefully to what others had to say and talk about things that they were interested in, always with a smile on my face.

Of course I made a lot of mistakes while I was job hunting, but job hunting is a part of life and so is making mistakes. In order to not make the same mistake twice I thought very hard about what I had done wrong and why. I believe that it isn't making the mistake that is wrong, it is neglecting it and doing nothing about it that is."

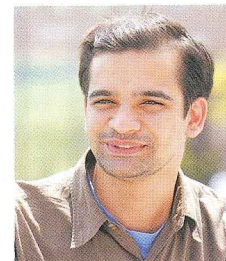
APS4 回生、ネパール

富士通株式会社 内定

入学した時はほとんど日本語が話せませんでしたが、ガイドブックから始めて半年で何とか会話に困らないまでになりました。コンピューターの授業を取る内に、自分でシステムを作る楽しさをおぼえ、IT企業への就職を考えるようになりました。システムエンジニアとして、特に医療関係のソフトを開発したいというのが将来の夢です。働く楽しさは、技術を高めていくとともに、いかにより良いチームワークを築いていけるかということにもあると思います。

APUでは言葉を覚えることと同時に多くの友達を作る努力をしました。自分のことを理解してほしい、誰もがそう思っています。そのためには相手の話をよく聞く、相手の興味のある話題作りをする、そして笑顔を絶やさない…私の心がけていたことです。

もちろん就職活動中は何度も失敗しました。しかし、就職活動も人生のプロセスだ、この失敗もそのプロセスの一部だと考えたのです。



ただし、同じ失敗は二度としないと肝に銘じて、自分なりに何が悪かったのか、その失敗の原因を真剣に考えました。失敗は決して悪いことではないけど、その失敗を放置しておくことは怖いことだと思っただけです。

An interview with the general director of an overseas Japanese corporation who came to APU for on-campus recruiting

オンキャンパスリクルーティングで来学された
日系海外法人社長インタビュー

Mr. SAITO Toshio

General Director of
SUMI-HANEL WIRING SYSTEMS CO., LTD.
in Vietnam

SUMI-HANEL WIRING SYSTEMS CO., LTD.
(住友電装ベトナム)

社長 斉藤 敏男氏

面接を終えた率直な感想は、皆さん非常に真面目で明るく、自分の考えをきちんと述べる、そんな話し方が自然にできていた、ということでしょうか。それは日本語能力の高さだけではなく、APUでの学生生活で、日本の文化や習慣を肌で感じ、さらに多種多様な価値観に直接触れることで学び得た経験が窺い知れる話しぶりでした。

特に印象的だったのは、面接の中で日本文化の「茶道」に興味があると答えた学生に理由を尋ねたところ、このような答えが返ってきたことです。「お茶室に入ると静かな空間が広がります。でもそこは沈黙の中にも互いをわかりあえる空間でもあると思います。」これには正直舌を巻きました。日本人の私でもそこまでの理解ができたかどうか・・・今年、住友電装のグループ各社で採用されたAPU学生の評判は聞いていましたが、それを実感することができました。こうした文化への深い理解を、社会に出て日系企業の実務運営にどんどん生かしてもらいたいですね。

ベトナムに本社を置くわが社は、グローバルな展開を目指す中で、幹部候補として、さまざまな現場で個性を発揮しながら活躍できる人材に期待しています。



After the interviews, my honest opinion of the students was that they were all very conscientious, friendly and able to express their thoughts clearly and naturally. Through talking with the students it became clear that this wasn't just because they had advanced Japanese language skills, but also because they had experienced and learned many things by studying at APU, an environment that brings them into direct contact with not only Japanese culture and customs but also the values of numerous other cultures.

I was particularly impressed when during an interview a student said that they were very interested in the Japanese tea ceremony. When I asked why, the student responded that "the atmosphere when you enter the tea ceremony room is very quiet and tranquil, and yet everyone knows and understands each other". This answer left me speechless and I wondered if even I, as a Japanese person, understood this part of Japanese culture as well as the student. After hearing stories about the APU students that were employed at the various Sumitomo Wiring Group offices this year, I realize that this understanding of Japan and the Japanese culture is evident in all these students. I hope these students make the most of their understanding of Japanese culture out in the workplace and while doing business at Japanese companies.

With the head office in Vietnam, Sumi-Hanel Wiring Systems, in its efforts to work towards global expansion, needs management-track people who can utilize their individuality in a range of environments.

「国際相互理解」をテーマに

展開された

新入生ワークショップ・プレゼンテーション大会

APUの多文化環境で学ぶための導入教育として開講されている1回生演習は、今年から「新入生ワークショップ」に名称が変更されました。セメスターの前半では、異文化間コミュニケーションについての講義を受け、ワークショップで事例を交えながら討論を行うという形式で授業を進めてきました。そして、セメスター前半の終了時に「異文化間コミュニケーション」をテーマにした大プレゼンテーション大会が行われたのです。与えられたテーマにどのようにアプローチし、どう表現するか。国内学生・国際学生共同で、自ら「異文化間コミュニケーション」を体験しながら準備を進めたプレゼンテーション大会の様子をご紹介します。

評価の高かったNo.13チーム・・・ 「財布を拾った二人」を ドラマ仕立てで発表し、 相互理解を促進させるプランを提案

同じテーマを与えられても、40チームあれば40通りのアプローチと表現方法があることがよくわかる大会となりました。ひたすらレポートを読むチーム、民族衣装に身を包み、民族舞踊を披露したチーム、漫画を使って発表したチームなど、まさにAPUの多様性を象徴したものでした。

ここで、採点の結果、評価が高かったチームのひとつ、No.13チームの発表内容を紹介しましょう。彼らは「財布を拾った二人」というシチュエーションをドラマ仕立てで発表しました。ドラマは2本立て、どちらも同じ状況でありながら、ほんの些細なことからまったく違う結末を迎えるのでした。



ドラマ①：道で財布を拾った二人。一人は日本人、もう一人は国籍不明です。お互い「警察に届けよう」としているのに、言葉が通じないため、相手の行動が理解できません。一人が「僕が警察に届けるから」と言って財布を拾い上げると、相手は盗むのではないかと勘違いして引きとめる。二人とも良いことをしようとしているのに、言葉が通じないために誤解を生じるばかりか、偶然出会った見ず知らずの二人の間に信頼関係も存在しないため、不快感だけが残り、不愉快な思いをしてしまいました。

ドラマ②：シチュエーションは①と同じです。しかし、決定的に違うのは、片言の英語で喋ったり、ジェスチャーを交えたり、お互い懸命に自分の言いたいことを伝えよう、相手の言いたいことを理解しようと努力している点です。この必死の思いがやがて通じ、結果、二人は拾った財布を持って、肩を組みながら警察に向かうのです。

その後このチームは、ドラマでの相互理解の方法を一例として、異なる国やグループとのより良い相互理解を築くために、努力と工夫を重ねている実在の団体の活動などを紹介した上で、APU市における相互理解促進のプランを掲げました。

このように20分の持ち時間の中で、伝えたい内容をどれだけ効率よく表現できるか、またどれだけ印象づけられるかといった点が評価のポイントとなります。このチームは、誰にでもわかりやすい「ドラマ」という手法を冒頭に使うことで、聴いている他の学生の関心を集め、その後例を挙げて自分達の考えたプランの効果を具体的に説明できた点などが、高く評価されたようでした。



市長からのミッション

今回の設定は、APUを一つの自治体《APU市》と想定し、学生たちはAPU市の職員として、市長に向けたプレゼンテーションを行うというものです。

そのAPU市長からのミッションは次の通り。「APU市は、2000年の市制施行の際に、＜国際相互理解都市宣言＞を行いました。市民間における国際相互理解の意識も徐々に高揚しはじめています。しかし、当面の課題として次のようなことが考えられます。諸君の考えやアイデアを聞かせてください。」

- ①現在世界中で＜国際相互理解＞が重要視されているが、それはなぜか。もう一度分析し、確認してほしい。
- ②①を踏まえた上で、異文化が混在している国や地域、都市、企業などにおける具体的な異文化理解、国際相互理解のための取り組みを調査してほしい。
- ③APU市の市民体系(英語と日本語が共通語。約70の国や地域から集まっている市民)を考慮しながら、APU市における異文化相互理解のためのプランを示してほしい。

準備の中でも

“異文化間コミュニケーション”

市長のミッションに従い、各ワークショップ単位で国際学生と国内学生を交えたチームを作って発表準備を進めていきますが、その過程で言葉の壁や文化の違い、個人の考え、価値観がぶつかることもあります。そう、この小さなグループにも「国際相互理解」が必要なのです。また、言葉は通じても、環境の違いなどから生まれるギャップもあります。一つの目的に向けて仲間と話し合い、作り上げていく中にも「国際相互理解」の大きなヒントがあるのでした。

きわだったTAの存在

この「新入生ワークショップ」では、TA(ティーチング・アシスタント)と呼ばれる学生たちが、授業運営をサポートしています。TAは、隔週で行われるワークショップの際に、各教室に1人ずつ配置され、議論などがスムーズに進むようにコーディネートする役割を担っています。今回の大会に向けても、自分が担当するワークショップの発表内容について相談に乗り、適切なアドバイスを与えるなど、新入生にとっては頼りになる「先輩」です。



そしてプレゼンテーション当日、ここでもTAは、司会進行を含め見事なコーディネーターぶりを発揮していました。各チームの発表後の質疑応答の時間には、発言を恥ずかしがって黙っている学生たちにTAから質問を投げかけたり、議論に発展するような提言を言ったりと、プレゼンテーション大会を大いに盛り上げてくれました。

「ウケるだけではダメ」という厳しい採点

聴講する学生一人ひとりには採点表が配られ、各項目を厳しくチェックし採点します。内容がいくら良くても、発表の際に説明がわかりにくい、はっきり聞き取れないといった点も審査の対象になります。逆に会場を盛り上げてはいたけれど、中身に乏しかった点なども判断されますので、採点は冷静に、かつシビアに行われました。

First-year students give insights into intercultural communication

An innovative course designed to help new students adjust to life on APU's multicultural campus was renamed this year to the **First-Year Student Workshop**. For the first half of the semester, the workshop featured lectures and discussions on intercultural communication that incorporated an array of illustrative real-life examples.

The first half culminated with a presentation competition on the theme of intercultural communication. The domestic and international students in the workshop worked closely together to hone their presentations, drawing on not only the things they learned in class, but also their own personal intercultural experiences.

A request from the Mayor

In the competition, the students assumed the role of civil servants and presented ideas to the "mayor" of a hypothetical APU City. This mayor had assigned the following mission:

Upon the inauguration of APU City in the year 2000, APU signed a declaration that designated it a "city of international mutual understanding". Significant progress has been made thus far in raising international awareness among its citizens. Your group is entrusted to carry out the following three tasks and report back to the Mayor of APU City.

1) Analyze why international mutual understanding is considered to be so important.



2) Investigate current efforts to improve mutual understanding in countries, regions, cities or corporations whose people represent a wide range of cultural backgrounds.

3) Develop practical initiatives that promote intercultural mutual understanding in APU City, taking

into consideration the city's unique social environment (dual languages of English and Japanese, citizens from approximately seventy countries and regions, etc.).

Intercultural communication starts outside the classroom

In the process of completing these three tasks, the domestic and international students in each group confronted a host of challenges arising from differences in language, culture, and individual values. The students soon discovered that intercultural communication plays a vital role, even in small groups. Diverse personal backgrounds—even among those who shared a language—were another source of friction. Through working together to reach a common goal, the students were able to get a glimpse of intercultural communication in action.



Skit #1: A Japanese person and a foreigner find a wallet on the street. Both wish to deliver it to the police, but the lack of a common tongue results in a misunderstanding: one person says "I'll take it to the police," as he picks up the wallet, but is stopped by the other pedestrian, who misinterprets the action as an attempted theft. Both people want to do the right thing, but the language barrier and the general lack of trust that exists

between two complete strangers leads to an uncomfortable situation marred by doubt and suspicion.

TAs hit the spotlight

Teaching assistants for the First-Year Student Workshop moderate the bi-weekly discussion sessions. Each group is assigned one student TA who ensures that the discussions proceed smoothly. They were an invaluable source of advice and support, particularly in the sessions leading up to the presentation competition.

On the day of the competition, the TAs chaired the proceedings with finesse, directly addressing questions to the more reserved students and providing suggestions to stimulate discussion.

Entertainment value is not the sole criterion!

The students in the audience rated each presentation by checking off items on an evaluation form that outlined a set of strict criteria. The audience judged not only the content, but also the manner of delivery, such as clarity of the explanations and vocal projection. Presentations that were entertaining but lacking in substance received fair and dispassionate appraisal.

Group #13 receives high marks for their skit

Naturally, each of the forty groups took its own unique approach to the same topic. The presentation styles were varied; some groups simply read a report, others performed folk dances in ethnic costumes, while

Skit #2: Again, two pedestrians come across a lost wallet. This time, however, the two people communicate through broken English and hand gestures, and they are committed to both making themselves understood and to understanding the other person. The skit ends with the two taking the wallet, arm in arm, to the nearest police station.

Building on the lessons of their skit, the group proceeded to introduce several real-life organizations that have adopted innovative methods for fostering communication among people with diverse cultural backgrounds. It then proposed a plan for promoting intercultural understanding in the imaginary APU City.

Groups were scored based on how efficiently and effectively they conveyed their message within the allotted 20 minute time period. This particular group was highly regarded for grabbing the attention of the audience with an easy to understand dramatic performance, then explaining in clear terms—citing numerous examples—the practical benefits of their original plan.



将来のAPU生の“わからない”や“困った”をサポートしたい

A helping hand

APUスピリットを胸に、

GASSが動く。

GASSってなんだろう？

GASSとはGlobal Admissions Student Staffの略で、私たちAPU学生が、APUに興味を持って、情報を必要としている皆さんをサポートするグループです。昨年できたばかりですが、学生自らが運営し、すでに200人を超えるメンバーが登録しています。

私たちもそうでしたが、「この大学を受験したい」もしくは「もう入学が決まった」という段階になって、情報を集めるには大学案内のパンフレットか、ホームページに頼るしかありません。でも、それでは本当に知りたい情報はなかなか見つけられない。どんな場所で暮らすことになるのか、先輩達はどのような生活を送っているのか…。さらにカリキュラムにいたっては、もうお手上げです。どんな先生のどんな講義があるのか、具体的に紹介されてはいてもわかりづらい。だからといって、「入学してみなければ」「受講してみるまで」わからないまま、ではあまりにも不安です。それが初めて日本に来る留学生となればなおさらです。そんな時、実際にAPUに通っている先輩に直接話が聞けたらどんなに心強いだろう…。ズバリ、そのリクエストに答えるためにできたのがGASSなのです。

私たちも伝えたい

一方で、入学してみると、「なあ～んだ、そんなことだったのか」と感じることや「これって聞いていたより面白い」ということにたくさん遭遇します。もっと前から知っていたらずいぶん楽しかったのに…。私たちも何度となくそう思いました。「情報が欲しいのに得られない」人達に対して、私たちは「伝えたいのに方法がない」—だんだん愛学心なども芽生えてくると、こうしたジレンマをなくしたいと思う学生も増えてきます。そこでGASSの登場。私たちが母体となって学生みんなの思いを形にしよう、とアクションを起こしたわけです。

Q&Aシステム

これまでは、特に海外からAPUに入学する学生のいろんな質問に対して、APU生がメールで回答するというシステムづくりをおこないました。寄せられた質問に対して、GASS登録者の中で質問に答えられる人に依頼して、あとは自由やり取りできます。

システムの開始早々、80件あまりの問い合わせがありました。別府の気候や家賃、アルバイトのことなど、生活の細々としたことについての質問が多く寄せられました。

また、国内学生に向けては「APUメイト.net」というホームページの質問コーナーで回答しています。登録者が多ければ多いほどいろんな角度からの回答ができ、GASSの活動も更に充実するでしょう。

GASSの活動を広く理解してもらい、学生だけでなくより多くの協力者を募りたいと考えています。

apumate.net

<http://www.apumate.net/>

オープンキャンパス

GASSの重要な活動の1つに、オープンキャンパスのサポートがあります。これは、高校生に実際に大学に足を運んでキャンパスライフを体感し、紙面だけでは伝えられないことを直接感じてもらおうことで、受験生の進路決定に少しも役立ててもらえれば、と企画されたイベ

ントです。具体的には、大学の授業体験・入試英語対策講座・サークル活動紹介、そして昨年も大好評だったキャンパスツアーなどが行われます。

このキャンパスツアーは、いくつかのグループに分かれ、キャンパス内をAPU学生の案内で散策するもので、もちろんランチタイムは一緒に学食に行きます。

オープンキャンパスは、APU学生と気軽に交流しながら直接いろいろな質問ができるだけでなく、ともに合格を目指す受験生同士の交流の場にもなっているのが魅力の一つです。他にも、APU学生によるキャンパスライフ相談コーナー、入試アドバイザーによる入試相談コーナー、保護者の方を対象にした説明会もあります。ぜひ一度足を運んでください。



韓国の高校生300人のAPU訪問をサポート

そのオープンキャンパスに、昨年6月、韓国のアンヤン外国語高校から300人の修学旅行団が訪れました。訪問の目的は、日本人学生との文化交流を通して日本の文化を体験し、アジア社会や国際分野に対してより深く学習するためとか。その訪問先の一つにAPUを選んだ理由が「国際的環境に恵まれているAPUの学生たちとの交流を通して、世界を見る目をもっと広めたかった」と聞き、非常にうれしく思いました。

2日間で150人ずつに分かれて訪れた韓国学生のサポートは、GASSのメンバーが考えた企画に基づいて実行されました。限られた時間の中で、中身が濃く効率的な交流が行えるように、韓国語の通訳など、GASS以外の学生にも参加を呼びかけ、協力してもらいました。おかげで活発な雰囲気の中で交流でき、企画した私たちも楽しく、満足できるものでした。

訪問を終えた韓国の学生たちからは、「APUの多国籍環境に強い印象を受けました。また、世界各国の大学生に会えてとても貴重な経験ができ、楽しかったです。温かくサポートしてくれたAPU学生の皆さんにも感謝の気持ちを伝えたいです」という感想が聞かれ、大きな励みになりました。



GASS members give future students the lowdown on campus life... and a healthy dose of APU spirit

What is GASS?

GASS, which stands for Global Admissions Student Staff, is a student-run organization that provides information and assistance to people who are interested in attending APU. Despite being formed just last year, we already boast over 200 registered members.

Once you've decided to take APU's entrance exam, or even after you've already been accepted, you have to rely on the university pamphlets or website for information about the university. That's how it was for us, and we realize how hard it is to find everything you're looking for from these sources only. You want to know more about where you'll live, about your senior classmates' lives and about the curriculum. Even after receiving in-depth explanations about your professors and your courses, it's not easy to see the big picture. No wonder new students are always so apprehensive; they can't see the "real" APU until they come here and take classes in person! If it's nerve-racking for the Japanese, imagine how much worse it must be for students coming from overseas. Just think how reassuring it would be to speak with a current APU student before coming here.

That's where GASS comes in. We are here to help with precisely these issues.

Here to help

Upon entering APU, students often find themselves saying things like, "Oh, so this is what it's like!" or "This is way more interesting than I thought it would be!" There have been many times when we too have wished we had known something beforehand.

People want information but can't find it... Students want to provide information but can't without a means

The dedicated members of GASS

Ever since GASS was established last year, I've been getting more and more involved with English interpretation and project planning—and starting this year, I'll be in a leadership position. I really enjoyed answering questions about APU last June when the Korean high school students visited our campus. Being the sole international student of the core members, I was very nervous when first joined, but now I see that we are all working toward the same goal. I want to harness all this wonderful energy and direct it toward the creation of helpful and relevant GASS events.

LEE Hyeon Soon

昨年GASS発足以来、英語の通訳やプロジェクトの企画などに少しずつ関わり、今年からリーダーとして活動しています。6月に韓国の高校生が訪問した時は、高校生から直接色々な話を聞くことができ、とても楽しかったです。コアメンバーの中で国際学生は私一人なので、最初はかなり緊張しましたが、メンバーの思いは一緒。この思いをイベントなどの形にして、活動をより活発にしていきたいです。

LEE Hyeon Soon

As a GASS member, I hope to organize more events that promote interaction between international students and Japanese high school students. I'm actually planning a special camp now that will allow international students to visit various high schools. Though talking with current APU students, high schoolers should get a better idea of what our university is like. It'll take some time to get this project off the ground, but I'll do my best!

HIDA Mika

今後GASSでもっと国際学生と日本の高校生の交流を活発にしていきたい！そこで今考えているのは国際学生と一緒に各高校で出張キャンパスを開催すること。国際学生と交流することで、日本の高校生はAPUのイメージをより具体的に掴むことができ、実現には時間がかかるかもしれませんが頑張ります！！

飯田実果



Lee Hyeon soon

to do so... The increase in the number of people who want to help solve this problem parallels the surge in APU pride among the student body. That's the inspiration behind GASS, and we're working hard to turn student commitment into action.

Q & A system

We've been operating a system in which we answer, by email, questions sent to us by future APU students. Most of these questions come from overseas. We find the GASS members appropriate for each question and have them correspond directly with the sender of the question.

Since its inception, this system has handled some 80 inquiries about life in Japan, including questions about the Beppu climate, the monthly rent, and part time jobs. We have been responding to questions from domestic students in the Q and A section on www.apumate.net. As our membership grows, our answers will come to incorporate a more diverse range of views. That's why we need the help of not only students but people from all walks of life for GASS to be a success!

Open campus

One of our most important activities is Open Campus, when high school students visit APU to see for themselves what the university is all about. We want our visitors to come away with a clear picture of what life at APU is like and we hope that the visit will help them, in some small way, make an informed decision about their university applications. Our visitors get a chance to observe a lecture; attend an intensive English language course; learn all about our student clubs and organizations; and of course, take the ever popular campus tour.

For the tour, we divide the visitors into smaller groups so that APU students can easily show them around the grounds. And don't forget, lunch is part of the tour, too!

Sure, open campus provides an opportunity to ask questions to APU students, but it also gives our visitors a chance to talk among themselves about the university application process. In addition, we have consultation booths for learning more about applications and campus life. We even organize an orientation session for parents. Open Campus is one event you don't want to miss!

Providing guidance to 300 Korean high school students

Last June, some 300 students from Anyang Foreign Language High School visited APU during Open Campus as part of a school trip to Japan. The objective of their visit was to experience Japanese culture first-hand through meeting and interacting with Japanese students. By extension, they were to learn something about Asian societies and world issues. We were delighted to learn that APU was included in their itinerary. "We wanted to broaden our worldview by meeting students who study on APU's international campus," they told us.

GASS developed a plan to accommodate the students, who came in two groups of 150, on alternate days of the two-day affair. We even called upon non-GASS members for help, ensuring that interpreters were available and helping our visitors have the best possible experience in the limited time available. Both the organizers and the participants found the event to be a wonderful educational experience. It was cultural exchange at its best.

After their visit, we were encouraged when the Korean students told us that they were very impressed with APU's multicultural environment and they were delighted to have had such a valuable experience in meeting university students from around the world. They also wanted to thank the students at APU for their warm support.

バ ー の 熱 い 思 い を 紹 介

I'm looking forward to developing more interesting projects and ideas that facilitate interaction among applicants and APU students. I want as many people as possible to learn about our university.

NISHIMURA Setsuko

これからは学生ならではの面白い企画やアイデアを出して、GASSを通して、入学を希望する学生と在生がもっと気軽に交流して、APUという大学を多くの方に知ってもらえれば良いと思います。

西村世津子

I'm happy to have this opportunity, through GASS, to show others how great APU is. I truly hope that we as members of GASS—and as students of APU—can play a part in making our university a better place.

YAMAOKA Satoko

GASSのメンバーとしてAPUの紹介に関わる事ができてうれしいです。GASSの活動を通して、私たちの立場からより良い大学づくりのお手伝いができればと考えています。

山尾聡子

I'm working now to make the upcoming Open Campus a success. I want this year's event to be even better than last year's! Open Campus should be more than just a tour of APU; visitors should get firsthand knowledge of what international exchange is all about. I want it to be a real eye-opener for each and every participant.

MAEKAWA Tetsuya

目下の目標は、オープンキャンパスを成功させること。それも去年以上のものを作りたいと燃えています。オープンキャンパスがただの大学の視察で終わるのではなく、国際交流を肌で感じられる、参加した方の人生の糧になるようなものにできたらと考えています。

前川哲哉

After spending a year here, I am convinced that APU must be one of the best universities in Japan when it comes to student enthusiasm and educational environment. I became a core member of GASS because I wanted to do whatever I could to help applicants see what a great place this is. I'll keep working with my GASS friends to help improve the APU experience!

SAKAGUCHI Hiroki

APUに来て1年が過ぎましたが、やる気のある学生の多さ、恵まれた教育環境は日本でも屈指の大学ではないかと感じています。そんなAPUを、希望と期待に満ち溢れた少しでも多くの受験生に知ってもらいたい、その手助けができれば嬉しいと思い、GASSのコアメンバーになりました。他のメンバーと協力して、これからのAPUを育てる力になればと考えています。

坂口広樹

I decided on APU after receiving advice from GASS.

YOO Chul Sung (APM 1, Korea)

A high school teacher first told me about APU last July. I saw how close APU was to my "ideal university", and I wanted to know more. Since I was busy with school, my parents visited APU in my place to see what it was like. Several GASS members helped my parents during their visit, providing interpreters—since my parents don't speak Japanese—guiding them around the campus, finding accommodation, and giving them road directions. A number of students and university staff kindly provided information about life at APU. My parents found the visit to be very productive.

I decided to apply to APU after talking it over with my parents, and I think that the generous assistance provided by GASS was a big factor leading to my decision. Even now, my parents occasionally send questions to the students who helped them during their visit.

I'm still a first year student, so there are many things I want to study. I'll do my best in my academics and my extracurricular activities, and will work hard to realize my dreams for the future.

GASSの皆さんのアドバイスを受け、APUへの進学を決めました

YOO Chul Sung

(APM1回生、韓国)

昨年7月、高校の先生にAPUを紹介された時、私の理想とする大学のイメージに重なるところが多くて、もっとAPUについて知りたいと思うようになりました。そこで、学業で忙しい私の代わりに両親が直接APUを訪ねることにになり、その時にいるいとサポートしてくれたのがGASSの皆さんでした。皆さんは、日本語が理解できない両親のために通訳や学校紹介ガイド役を務め、宿泊先を探し、道案内までしてくれたそうです。おかげで私の両親は、先輩や学校の方々からAPUの情報や学生生活などについて色々教えてもらうことができ、訪問中の時間を有意義に過ごせました。

その後両親と話し合ってAPUに進学することを最終的に決めたのですが、それには、やはりGASSの皆さんにいろいろ助けてもらった影響が大きかったと思います。

今でも、両親のサポートをしてくれた先輩とは、連絡を取り合っ

ていろいろなことを教えてもらっています。まだ1回生なので、知りたいこと、勉強したいことがたくさんあります。勉強も学校生活も頑張っ

て将来必ず自分の夢を果たしたいです。



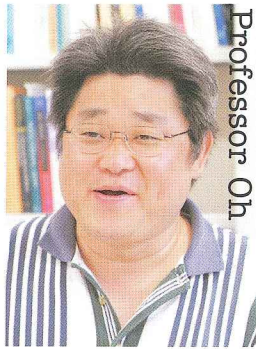
《Education at the graduate level / 大学院教育》

Real-life presentations: APU style shines at the graduate level

実践さながらのプレゼンテーション。大学院というフィールドで輝くAPUスタイル。

“Three consulting firms make their presentations, engaged in an intense competition for an order from the Asia Development Bank. Which plan will capture the interest of the client?” This is just one portion of the “Development Finance” subject at the APU Graduate Schools, founded in April of 2003 for the purpose of cultivating human resources able to solve in a practical manner, issues confronting the Asia Pacific region. Courses at the graduate schools are unique, presented in a new manner that fully utilizes the advantages APU has to offer.

“アジア開発銀行の受注をめくり、3社のコンサルタント会社が激しいプレゼンテーションを繰り広げます。はたしてどの会社の企画がクライアントの心を動かしたのでしょうか…”これは「開発金融論」の講義風景の一部です。アジア太平洋地域が直面する問題を実践的に解決できる人材を養成していきたいという目的で2003年4月に開設された大学院では、大学院の特長を生かしながら、非常にユニークで、これまでになかったスタイルの講義がおこなわれています。



Professor Oh

The Independent Field Study

Joint seminar by Professors TAKAMOTO Akihiro & OH Ingyu

高元昭紘、呉寅圭 共同演習科目

自分を売り込む。さて、そのアプローチは？

講義内容：

夏や冬の休みを利用してインターンシップや企業調査を行うために、各々行きたい企業に直接コンタクトを取って自分を売り込む。その企業へのアプローチの方法を学ぶ授業。その間、現状の報告を行いながらアドバイスを受ける。インターンシップを実現させ、レポートを提出しパスすれば単位取得。

授業を進める中で、高元教授は、自発・自立の精神を強調する。まず自分がどのような実務経験を積みたいか、どのような調査を行いたいかをよく考え、会社を選ぶ。そしてその会社の、ある部門や分野で、自分がどのような貢献ができるか、まず手紙で的確に伝える。しっかりと履歴書も必要。受け入れ側の視点に立つことが大切だ。誰に伝えるのか、そのターゲットの選定や、フォローアップの仕方にも工夫を要する。大学院生は学部生と違ってより専門性を求められる立場にある。「いざとなれば大

Seminar Content: Making use of the summer and winter holidays, graduate students make direct contact with and market themselves to companies or organizations with which they are wanting to conduct research or intern. In the Independent Field Study graduate students learn how to approach companies and organizations. In class, while reporting on their current standing, the progress they have made so far with various companies and organizations, students receive advice from Professors Takamoto and Oh. If students intern or conduct research at a company or organization, submit a report and pass the Independent Field Study, credits are awarded.

Through out the Independent Field Study, Professor Takamoto emphasizes self-motivation and independence. Students must first determine the type of practical experience they would like to gain, or what kind of company research they would like to conduct, prior to selecting a company or organization. They must then determine what they can contribute to what department or field within a company and then make contact, via letter, precisely explaining their position. A well written resume is also in order. It is also very important to access the situation from the point of view of the possible employer. The Independent Field Study requires students to have a scheme or plan of action with regards to who they will convey their information, how they will determine their target, and in what way they should follow-up all leads.

Graduate students are different from undergraduate students in that they are expected to be specialists in their respective fields. For that reason, it is important that students do not rely on the university to supply them with opportunities at the last minute, but that they pioneer their own advancement. This is a good opportunity for students to think about and test their core competence and sharpen their communication skills by appealing to companies.

Professor Takamoto tells students not to complain about being at a disadvantage for not being able to speak Japanese or that Japanese companies are closed, but encourages them by stressing the amount they can learn through approaching companies. Of course, students are not limited to Japanese companies and organizations, but may choose to intern or conduct research at companies in locations domestic and international. The ultimate aim of this seminar is to produce professionals with vitality.



Professor Takamoto

授業を受けて

Comments by students taking the course

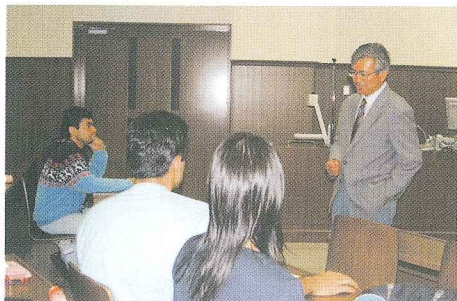
豊富な経験に裏付けられた深い知識や教授法に感銘

SACHDEVA Dheeraj

(経営管理研究科(MBA)1回生、インド)



今、東京にある投資銀行でのインターンシップを計画しています。高元先生は厳しい批評家ですが、豊富な経験に裏付けられた先生の深い知識や教授法に感銘を受けます。謙虚で建設的な批評をくれると同時に、新しいアイデアや励ましもたくさん与えてくれます。卒業後は1-2年間日本で働き



学が・・・]という甘えは捨てて、自分で開拓していくことが大切。この過程は、自分のコア・コンピタンスについてよく考え、それをアピールするコミュニケーション能力を磨き、さらにそれを試す良い機会となる。

日本語ができないと不利とか、日本企業は閉鎖的であるといった泣き言を言うなど叱咤激励しながら、高元教授は企業アプローチという実践から学ぶことの大きさを強調する。対象とする企業は日系に限らず、所在地も内外を問わない。活力のあるプロフェッショナルに育てるのがこの講義のねらいである。

Understanding consulting companies through presentations

Lecture by Dr. V.M. NAIR on Development Finance

V. M. NAIR 講義科目「開発金融論」

プレゼンテーションを通して コンサルティング会社の仕組みを理解

講義内容：

国際金融機関・アジア開発銀行（ナイア教授）が3社のコンサルタント会社（各グループ）に仕事を発注。その仕事をめぐり、それぞれの企画をプレゼンテーションするという講義内容。講義を通して、コンサルティング会社の仕組みを理解するもので、ある企画が実現に至るまでのプロセスをフローチャートを使って説明。同時に学生はプレゼンテーションの準備を行う。

主題に対して情熱的に語り、世界各国での経験について急に脇道にそれてしゃべりだす……そんな独特のテンポでナイア教授の講義は進められます。しかし、一見余談にも思える話の中に貴重な情報が数多く含まれているのもこの講義の魅力であり、それを象徴するのが、今回のプレゼンテーションです。各グループに与えられた発表時間はわずか15分。できるだけ現実に近い環境が設定される中で、学生たちは架空の肩書と資質で懸命にプレゼンテーションを行いました。さらに発表後には「このプロジェクトと自治体、国家の政府、民間企業はどういう形で関わるのか？」「通信網が整っていない現地はどうやって情報を収集するのか？」など、審査員の具体的で厳しい質問に回答し、ようやく全てが終了します。

最後にナイア教授は、見事に勝ち残った会社を発表し、「プロジェクトをどのように遂行するか、スケジュール、資金の分析、政府・企業などから何を求めるかをできるだけ具体的に分かりやすく説明することが重要。また、プロジェクトの実用性とコンサルティング会社の長所や地域での実績を強調することも大切」という講評を締めくくりました。

Lecture content:

The Asian Development Bank (ADB), an international financial institution represented by Dr. Nair, is accepting bids from three consulting firms on an upcoming project. Each consulting firm is represented by a group of students, which must develop and present its plan. The entire process is flowcharted through to final plan implementation, with students following the explanation while preparing their presentations.



Dr. Nair



Dr. Nair dynamically explains the process, branching off to discuss his experiences in other countries, giving the course a distinct, inimitable flow. While at first glance, these digressions may appear irrelevant to the course, on the contrary they contain valuable nuggets of information. Viewing a presentation well represents this subject. Each group has only 15 minutes to make its presentation. Students are very serious in their presenting, even assuming titles and qualifications, in effort to simulate an environment close to the real thing. After the presentations are complete, students have to field difficult questions, such as “How are local and national government and private enterprise involved in this project?” or “How will you collect information on-site, where the communications infrastructure is still underdeveloped?” After

授業を受けて

Comments by students taking the course

日本語の勉強を続けながら
国際関係を英語で学べる
環境が魅力

SHELTON, Douglas Alan

(アジア太平洋研究科1回生、アメリカ)

日本語の勉強を続けながら国際関係と国際協力を英語で学べるAPU大学院の環境は非常に魅力的です。熱心で、経験豊富なナイア先生のゼミからもいろいろな知識を得ることができます。開発途上国への援助を行うにはどのようなアプローチが効果的か、どのような課題に直面するかを、この講座を通じて学習しています。卒業後は、政府か非政府の援助組織、又は国際的なNPOの中で、日本に関わりのある仕事をしたいと思っています。コンサルティング会社と援助組織、NPOは密接な関係を持つので、この授業で取得した知識は、将来非常に役立つと思います。



A great environment for learning, letting me learn Japanese while studying international relations in English

SHELTON, Douglas Alan (GSA 1, USA)

I think the academic environment of the APU graduate school is just wonderful, because it lets me continue my study of the Japanese language while at the same time learning about international relations and international cooperation in English. Professor Nair brings commitment and experience to his lectures, and I learn a lot from him. Thanks to his lectures, I have a better idea now of what approach is most effective when providing support in an industrializing nation, and what problems are likely to be encountered. After program completion I plan to work in a government or other organization providing development assistance, or an international NPO, doing work involving Japan. Consulting firms work very closely with assistance organizations and NPOs, so I am confident that what I learn here will be invaluable in the future.

announcing the winning group, Professor Nair commented “It is important to explain, as concretely and simply as possible, how the project is advanced, scheduling, financing analysis and what government and private business will have to do. Other crucial points are to stress the practical utility of the project, and emphasize the advantages of the consulting company and experience in the local region.”

たいと考えていますが、そのためにはもっと日本語力を高めなければと思います。

Impressed by the deep knowledge and excellent teaching methods of faculty, backed up by rich experience

SACHDEVA Dheeraj (GSM-MBA 1, India)

I am hoping to get an internship at an investment bank in Tokyo. Professor Takamoto is a tough critic, but I was deeply impressed by his extensive knowledge, backed up by rich experience, and the way he teaches. He provides us with constructive criticism, along with plenty of new ideas and encouragement. I want to work in Japan for a year or two after program completion, and to do that I'll have to improve my abilities in Japanese, too.

日本の職場環境を体験できる
すばらしい機会

NGUYEN Thuy Thi Thanh

(経営管理研究科(MBA)1回生、ベトナム)

今年の夏休みは、監査法人トーマツの大阪事務所、投資相談サービスに焦点を当てたインターンシップを行うことが決まっています。このインターンシップは日本の職場環境（企業風土）を体験できるすばらしい機会になると期待しています（ただしこの期間の費用は自己負担と厳しいのですが）。卒業後は帰国して、留学前に勤めていた Vietnam Auditing Company に戻り、日本人クライアントを担当する仕事をします。日本からの顧客に対するサービスの向上をめざして、どんな勉強ができるのか期待しています。



A wonderful opportunity to experience the Japanese working environment

NGUYEN Thuy Thi Thanh (GSM-MBA 1, Vietnam)

During summer break this year I will be working at the Osaka office of Tohmatsu & Company, an auditor, with the emphasis on investment consulting. I really look forward to the internship as a great opportunity to experience the Japanese workplace, and corporate environment. (through it is a big financial burden as I must pay all my expenses myself). After program completion I'll return to my job at the Vietnam Auditing Company, where I worked before coming to APU, and will be handling Japanese clients. I'm confident I'll get some useful experience at Tohmatsu in how to provide Japanese clients with the best possible service.

Friendship agreements foster cross-cultural understanding in local towns

友好交流協定を通じて地元市町との国際交流が活発化

APUは、地域との交流をより深めていこうと、大分県内の市や町と友好交流協定を締結し、様々な交流事業を進めています。今年に入ってから締結した別府市、蒲江町を含め、現在まで5つの市・町と協定を結びました。

5番目となった蒲江町との友好交流協定は4月19日(月)に結ばれ、交流事業に中心となって携わる国際文化支援アドバイザーに国際学生3名が任命されました。

3名は5月1日(土)に蒲江町中央公民館で開催されたアドバイザー委嘱式に参加し、教育長から委嘱状を受け取った後、蒲江町内を見学しました。

今後は、蒲江町内の小中学校で英語を教えるほか、ホームステイや町のイベントへの参加、また電子メールを通じた交流などを行う予定です。

また、2003年7月に協定を結んだ鶴見町は、昨年度の交流事業で活躍した教育文化支援アドバイザーへの感謝状贈呈式と、今年度新

たに任命されたアドバイザーの委嘱式を4月28日(水)午後、APUコンベンションホールで行いました。

式では昨年度のアドバイザーと、交流事業に協力した学生あわせて5名に感謝状が贈呈されたほか、今年度新たに任命されたアドバイザー3名に委嘱状が渡されました。

最後に記念撮影が行われ、感謝状受領者は鶴見町から用意して頂いた揃いののはっぴを着て撮影を行いました。

APU has entered into friendship exchange agreements with cities and towns in Oita Prefecture, and is now engaged in a range of exchange activities. Thus far, agreements have been signed with five cities and towns. Two of these agreements with Beppu City and Kamae Town have been signed this year.

The fifth friendship exchange agreement, with Kamae Town, was signed on April 19, 2004. Three international students have been assigned as international exchange advisors, handling primarily cultural exchange activities.

The three students were officially welcomed at a ceremony on May 1, held at the Chuo Civic Hall in Kamae Town, receiving certificates from the town's superintendent of education. The group then toured Kamae Town.

In the future, APU students will teach English at elementary and junior high schools in Kamae Town, participate in homestays and various town events, and engage in exchange activities via e-mail.

Tsurumi Town, which entered into a similar agreement in July 2003, presented the educational and cultural support advisors who visited the town with certificates of appreciation, while the welcoming ceremony for the new advisors who will help out this year was held on April 28 at the APU Convention Hall. At the ceremony, certificates of appreciation were presented to five students, including last year's advisors



and students who participated in exchange activities. Certificates were also presented to the three students appointed as advisors for this year.

Finally, commemorative photos were taken of the last year's advisors and supporters dressed in happi-coats.

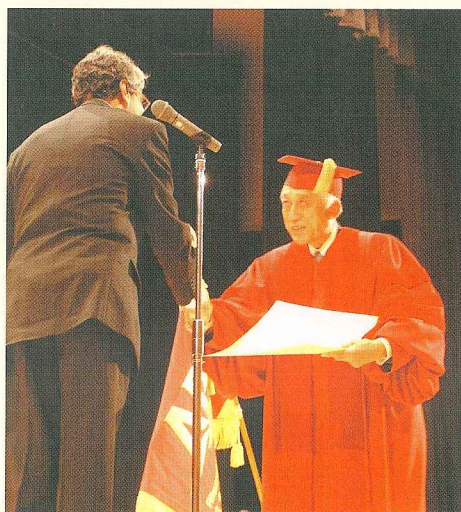


Honorary doctorate presented to Dr. SEN Genshitsu

千玄室先生に名誉博士号を贈呈

入学式が行われた4月2日(金)、ミレニアムホールで名誉博士号贈呈式が開催され、アドバイザー・コミッティ委員として、本学の学術・発展にご尽力を賜るとともに、学術・文化の交流に大きな役割を果たしておられる千玄室(15世千宗室)先生に立命館アジア太平洋大学名誉博士号が贈呈されました。

式では、カセム学長から千玄室先生のご紹介が行われた後、学位記が授与され、肩章が千先生の肩にかけられました。



千玄室(15世千宗室)先生は、本学の客員教授にも就任されており、キャンパス内に「和心庵」を寄贈いただき、特に国際学生が日本文化に触れる貴重な機会を賜るなど、APUに多大なご支援とご協力をいただいています。

The presentation ceremony was held on April 2, the day of the admissions ceremony, in the Millennium Hall. At the ceremony, Dr. SEN Genshitsu (SEN Soshitsu XV) was presented with an honorary doctorate in recognition of his contributions as a member of the Advisory Committee in the establishment and development of the university and his role in academic and cultural exchange.

At the ceremony, President Cassim introduced Dr. Sen, then presented him with the doctorate and a sash. In his role as visiting professor, Dr. Sen has provided a variety of assistance and support to Ritsumeikan Asia Pacific University, including donating the Washin-an tearoom to the campus, and especially providing foreign students with an opportunity to contact Japanese culture.

The 7th top executive lecture

第7回トップ講演会



大分県出身で、本学のアドバイザー・コミティにもご就任いただいているキャノン株式会社の御手洗富士夫代表取締役社長を講師にお迎えした「第7回トップ講演会—キャノンの経営戦略—」が、6月16日(水)、ミレニアムホールで開催され、約1000人の学生と市民の方が聴講しました。

御手洗氏は、「グローバル化・多角化」を基本戦略に、世界的企業に発展したキャノンの経営法について講演され、最後にAPU学生へのメッセージとして「これからは自分の生まれ育った国で培った文化観・価値観を基本に、他国の

文化観・価値観を知識や教養として持っている「真の国際人」が求められる時代。そういう意味ではAPUは他国を学ぶことができるチャンスに非常に恵まれている。APUで学び、21世紀を担うリーダーとなる一流の国際人になってください」と述べられました。

Mr. MITARAI Fujio, President and CEO of Canon Inc., was the guest speaker for the 7th Top Executive Lecture on Wednesday, June 16. Some 1000 students and community members attended his presentation, entitled "Canon's Corporate Strategies". Mr. Mitarai is a native of Oita Prefecture and a member of the APU Advisory Committee.

The presentation outlined how globalization and diversification were the key management strategies employed by Canon to become a world-class corporation. "The world increasingly needs individuals who can function as full-fledged members of the global community; people who can skillfully overlay foreign knowledge and values onto their own cultural mores," said Mr. Mitarai. "Here at APU, you have an amazing opportunity to learn about the world. I hope that you will use what you learn here to become world citizens and leaders of the 21st century."



The spring 2004 conferral ceremony for scholarships and awards

「2004年度 春季奨学金授与式・学生表彰式」が行われました

ANDO Momofuku Scholarship 安藤百福名誉博士奨学金

| | |
|---------------------------|------------------|
| PODDAR, Geetanjali | APS 3, India |
| PARK Hang Eun | APM 3, Korea |
| Priya Dugar | APM 3, India |
| SAMSUDEEN, Siyana Habeeba | APS 2, Sri Lanka |

Academic Merit Award 2003年度秋 Semester 優秀学生

College of Asia Pacific Studies アジア太平洋学部

Awards and Scholarships 表彰および奨励金

| | |
|-------------------------|-----------------|
| SAENSATHIT, Vongvieng | APS 4, Laos |
| 富田 順敬 / TOMITA Yoritaka | APS 4, Japan |
| HU Jun | APS 3, China |
| BAHK So Won | APS 3, Korea |
| CHALINRAT Patchamone | APS 2, Thailand |
| 重命 亨季 / SHIGENAGA Koki | APS 2, Japan |

Awards 表彰

| | |
|--------------------------|------------------|
| NGUYEN, Lan Anh, Thi | APS 4, Vietnam |
| PAI Chun-yu | APS 4, Taiwan |
| KONG Dan | APS 4, China |
| 加藤 友佳子 / KATO Yukako | APS 4, Japan |
| 辻川 拓人 / TSUJIKAWA Takuto | APS 4, Japan |
| LEONG Wei Xiong | APS 3, Malaysia |
| SUGANDA, Michelle Widyan | APS 3, Indonesia |
| LE Anh Thu, Hoang | APS 3, Vietnam |
| 福崎 恵子 / FUKUZAKI Keiko | APS 3, Japan |
| LU Yu Chiu | APS 2, Malaysia |
| TAN Bee Lin | APS 2, Malaysia |
| 吉野 沙織 / YOSHINO Saori | APS 2, Japan |
| 岩田 菜月 / IWATA Natsuki | APS 2, Japan |
| TANINA, Elena Bakstonova | APS 1, Bulgaria |

College of Asia Pacific Management アジア太平洋マネジメント学部

Awards and Scholarships 表彰および奨励金

| | |
|------------------------------|---------------------------|
| FUNG Yee Luh | APM 4, Malaysia |
| DOBROVOLSKAIA, Anna | APM 4, Russian Federation |
| WU Kun Lung | APM 3, China |
| RODSUPHOT, Pornpan | APM 3, Thailand |
| Priya Dugar | APM 3, India |
| RAHMAN Mohammad Mahmudur | APM 2, Bangladesh |
| SHERIFFDEEN, Muhammedh Yasir | APM 2, Sri Lanka |

Awards 表彰

| | |
|-----------------------|-------------------|
| PHOUNVIXAY, Vidaovanh | APM 4, Laos |
| SETIYAWAN, Tirawati | APM 4, Indonesia |
| 甲斐 麻利子 / KAI Mariko | APM 4, Japan |
| CHALERMKARNCHANA Tom | APM 4, Thailand |
| TING Lee Tee | APM 3, Malaysia |
| MAO Phallin | APM 3, Cambodia |
| KIM Min Ju | APM 3, Korea |
| SUN Lili | APM 2, China |
| DEBNATH Sajit Chandra | APM 2, Bangladesh |
| LEE Hyeon Soon | APM 2, Korea |
| CHANDRA, Norvin | APM 2, Indonesia |
| RUDZEVICIUTE Monika | APM 1, Lithuania |

APU Information gets a website!

「APU Information」 Webページができます!!

「APU Information」は、学内の動きや学生の皆さんの活動の様子を誌面でご紹介してきた広報誌ですが、この度、Webページを開設することになりました。

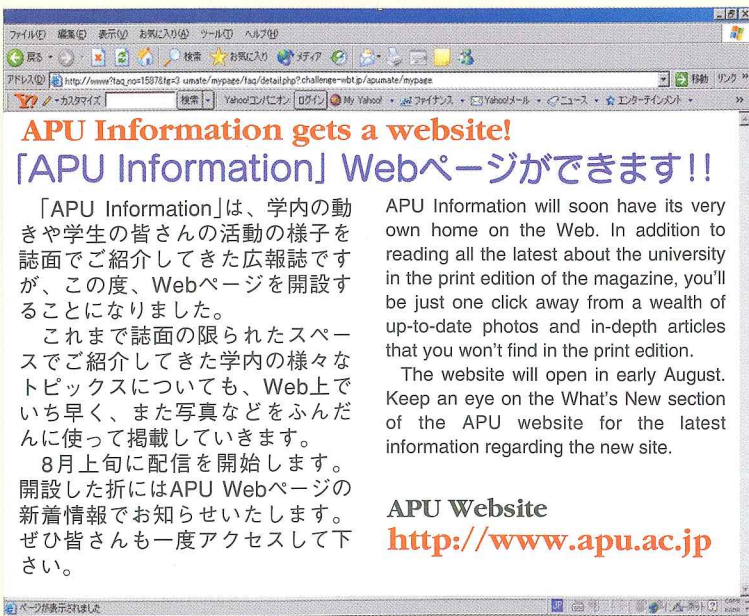
これまで誌面の限られたスペースでご紹介してきた学内の様々なトピックスについても、Web上でいち早く、また写真などをふんだんに使って掲載していきます。

8月上旬に配信を開始します。開設した折にはAPU Webページの新着情報でお知らせいたします。ぜひ皆さんも一度アクセスして下さい。

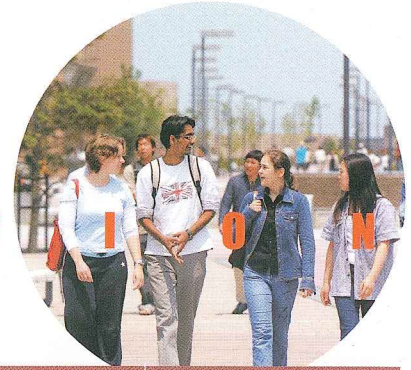
APU Information will soon have its very own home on the Web. In addition to reading all the latest about the university in the print edition of the magazine, you'll be just one click away from a wealth of up-to-date photos and in-depth articles that you won't find in the print edition.

The website will open in early August. Keep an eye on the What's New section of the APU website for the latest information regarding the new site.

APU Website
<http://www.apu.ac.jp>



I N F O R M A T I O N



2004年度立命館アジア太平洋大学役職者のご紹介 Introduction of New APU Officials

| 役職名 | 氏名 | Post | Name |
|-----------------|------------|--|-------------------|
| 学長 | カセム, モンテ | President | CASSIM, Monte |
| 学長補佐 | 甲賀 光秀 | Advisor to the President | KOGA Mitsuhide |
| 副学長 | 林 堅太郎 | Vice President | HAYASHI Kentaro |
| 副学長(教学・学生担当) | 薬師寺 公夫 | Vice President (Academic and Student Affairs) | YAKUSHIJI Kimio |
| 副学長(企画担当) | 仲上 健一 | Vice President (Development Affairs) | NAKAGAMI Ken'ichi |
| 副学長(総務・財務担当) | 西田宗旦 | Vice President (General and Financial Affairs) | NISHIDA Muneaki |
| アジア太平洋学部長 | 福井捷朗 | Dean, College of Asia Pacific Studies | FUKUI Hayao |
| アジア太平洋マネジメント学部長 | 井草邦雄 | Dean, College of Asia Pacific Management | IGUSA Kunio |
| アジア太平洋研究科長 | 福井捷朗 | Dean, Graduate School of Asia Pacific Studies | FUKUI Hayao |
| 経営管理研究科長 | パッテン, ロナルド | Dean, Graduate School of Management | PATTEN, Ronald J. |
| 教学部長 | 中野 雅博 | Dean, Academic Affairs | NAKANO Masahiro |
| 学生部長 | 山神 進 | Dean, Student Affairs | YAMAGAMI Susumu |
| 国際部長 | マニ, エー | Dean, International Affairs | MANI, A. |

国・地域別の学生数 (2004年5月1日付) Student Enrollment (as of May 1, 2004)

| 国・地域 | Country or Region | 学部学生/ Undergraduate Students | 大学院学生/ Postgraduate Students | 学部・大学院 合計/ Undergraduate & Postgraduate Total |
|----------|-------------------|---------------------------------|---------------------------------|---|
| 韓国 | Korea | 443 | 1 | 444 |
| 中国 | China | 266 | 21 | 287 |
| 台湾 | Taiwan | 142 | 2 | 144 |
| ベトナム | Vietnam | 105 | 15 | 120 |
| インドネシア | Indonesia | 97 | 6 | 103 |
| タイ | Thailand | 83 | 3 | 86 |
| スリランカ | Sri Lanka | 59 | 0 | 59 |
| インド | India | 41 | 9 | 50 |
| マレーシア | Malaysia | 23 | 4 | 27 |
| フィリピン | Philippines | 16 | 7 | 23 |
| ネパール | Nepal | 19 | 0 | 19 |
| モンゴル | Mongolia | 14 | 5 | 19 |
| ラオス | Laos | 14 | 1 | 15 |
| パキスタン | Pakistan | 15 | 0 | 15 |
| ミャンマー | Myanmar | 8 | 7 | 15 |
| バングラデシュ | Bangladesh | 10 | 4 | 14 |
| シンガポール | Singapore | 8 | 3 | 11 |
| カンボジア | Cambodia | 7 | 0 | 7 |
| ウズベキスタン | Uzbekistan | 4 | 0 | 4 |
| イラン | Iran | 2 | 1 | 3 |
| ヨルダン | Jordan | 2 | 1 | 3 |
| グルジア | Georgia | 1 | 0 | 1 |
| シリア | Syria | 1 | 0 | 1 |
| トルコ | Turkey | 1 | 0 | 1 |
| ケニア | Kenya | 23 | 1 | 24 |
| ガーナ | Ghana | 12 | 0 | 12 |
| ウガンダ | Uganda | 10 | 0 | 10 |
| ナイジェリア | Nigeria | 10 | 0 | 10 |
| カメルーン | Cameroon | 4 | 0 | 4 |
| マリ | Mali | 3 | 0 | 3 |
| ザンビア | Zambia | 2 | 1 | 3 |
| エチオピア | Ethiopia | 2 | 0 | 2 |
| マラウイ | Malawi | 2 | 0 | 2 |
| スーダン | Sudan | 1 | 1 | 2 |
| コートジボワール | Cote d'Ivoire | 1 | 0 | 1 |
| ジブチ | Djibouti | 1 | 0 | 1 |
| エジプト | Egypt | 1 | 0 | 1 |
| マダガスカル | Madagascar | 1 | 0 | 1 |
| モロッコ | Morocco | 1 | 0 | 1 |

| | | | | |
|-----------|--------------------|----|---|----|
| ジンバブエ | Zimbabwe | 1 | 0 | 1 |
| アメリカ合衆国 | U.S.A. | 29 | 5 | 34 |
| カナダ | Canada | 10 | 1 | 11 |
| メキシコ | Mexico | 1 | 4 | 5 |
| ボリビア | Bolivia | 2 | 0 | 2 |
| エクアドル | Ecuador | 2 | 0 | 2 |
| ペルー | Peru | 1 | 0 | 1 |
| ブラジル | Brazil | 1 | 0 | 1 |
| コスタリカ | Costa Rica | 1 | 0 | 1 |
| ジャマイカ | Jamaica | 1 | 0 | 1 |
| オーストラリア | Australia | 12 | 1 | 13 |
| パプアニューギニア | Papua New Guinea | 6 | 1 | 7 |
| ニュージーランド | New Zealand | 4 | 0 | 4 |
| サモア | Samoa | 3 | 1 | 4 |
| トンガ | Tonga | 0 | 2 | 2 |
| パラオ | Palau | 1 | 0 | 1 |
| リトアニア | Lithuania | 14 | 0 | 14 |
| ブルガリア | Bulgaria | 10 | 1 | 11 |
| ハンガリー | Hungary | 8 | 0 | 8 |
| エストニア | Estonia | 7 | 0 | 7 |
| イギリス | United Kingdom | 7 | 0 | 7 |
| ロシア連邦 | Russian Federation | 4 | 0 | 4 |
| フィンランド | Finland | 3 | 0 | 3 |
| ルーマニア | Romania | 2 | 1 | 3 |
| ウクライナ | Ukraine | 3 | 0 | 3 |
| ドイツ | Germany | 2 | 0 | 2 |
| クロアチア | Croatia | 1 | 0 | 1 |
| チェコ | Czech Republic | 1 | 0 | 1 |
| オランダ | Netherlands | 1 | 0 | 1 |
| ポーランド | Poland | 1 | 0 | 1 |
| スロバキア | Slovakia | 1 | 0 | 1 |
| ラトビア | Latvia | 1 | 0 | 1 |
| モルドバ | Moldova | 0 | 1 | 1 |

| | 学部学生/ Undergraduate Students | 大学院学生/ Postgraduate Students | 合計/ Total |
|------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|--------------|
| 国際学生 合計 | | | |
| International Students Total | 1,596 | 111 | 1,707 |
| 国内学生 合計 | | | |
| Domestic Students Total | 2,343 | 12 | 2,355 |
| 総計 | | | |
| Grand Total | 3,939 | 123 | 4,062 |